ザ・ブルーハーツと福音

根無一信

はじめに

本稿は八十年代後半から九十年代前半にかけて活躍した邦ロックバンド THE BLUE HEARTS（以下、ブルーハーツ）についての評論である。とくに、バンドの代表曲として知られる「リンダリンダ」と「TRAIN-TRAIN」という曲の歌詞の分析を行うことが本稿の目的である。何はともあれ、まずは歌詞を見てみよう。[1]

●リンダリンダ（一九八七年）作詞・作曲：甲本ヒロト

ドブネズミみたいに美しくなりたい
写真には写らない美しさがあるから

もしも僕がいつか君と出会い話し合うなら
そんな時はどうか愛の意味を知って下さい

ドブネズミみたいに誰よりもやさしい
ドブネズミみたいに何よりもあたたかく

もしも僕がいつか君と出会い話し合うなら
そんな時はどうか愛の意味を知って下さい

愛じゃなくても恋じゃなくても君を離しはしない
決して負けない強い力を僕は一つだけ持つ

●TRAIN-TRAIN（一九八八年）作詞・作曲：真島昌利

栄光に向って走るあの列車に乗って行こう
はだしのままで飛び出してあの列車に乗って行こう
弱い者達が夕暮れさらに弱い者をたたく
その音が響きわたればブルースは加速して行く
見えない自由がほしくて
見えない銃を撃ちまくる
本当の声を聞かせておくれよ

ここは天国じゃないんだ かと言って地獄でもない
いい奴ばかりじゃないけど
悪い奴ばかりでもない
ロマンチックな星空にあなたを抱きしめていたい
南風に吹かれながらシュールな夢を見ていたい

世界中に定められたどんな記念日なんかより

あなたが生きている今日はどんなに素晴らしいだろう
世界中に建てられてるどんな記念碑なんかより
あなたが生きている今日はどんなに意味があるだろう

栄光に向って走るあの列車に乗って行こう
はだしのままで飛び出してあの列車に乗って行こう
土砂降りの痛みの中を傘もささず走って行く
嫌らしさも汚ならしさも剥き出しにして走って行く
聖者になんてなれないよ だけど生きてる方がいい
だから僕は歌うんだよ精一杯でかい声で

「リンダリンダ」における「ドブネズミみたいに美しくなりたい」という衝撃的な詞には、「ほんとうの美しさ」とは何かということを問うて常識を破壊するような凄みがある。だから、「リンダリンダ」を「深い」というプラスの感慨で評価することが一般的に行われているように思う。とはいえ、ブルーハーツによって提示される「ほんとうの美しさ」というものを理解すること自体はたいして難しくはない。後に続く「写真には写らない美しさ」や「ドブネズミみたいに誰よりもやさしい」という詞から、「ほんとうの美しさ」とは「やさしさ」のことだと簡単に察しがつくからである。「心の美しさ」や「内面の美しさ」といったような表現が意味する内容を少しも理解できない人などいないはずで、「美しさ」というものについては皆なにかしらそれなりに「深い」洞察をすでに持っている。だから、「ほんとうの美しさ」とは「やさしさ」のことだという主張のことを「深い」と評するのはあたらないと私は思う。

しかし、この歌はやはり「深い」。それは、「やさしさ」を「美しさ」とみる立場に対しての評価ではなく、ドブネズミを「やさしい＝美しい」と表現する立場そのものに対しての評価である。なぜドブネズミは「誰よりもやさしい＝美しい」のだろうか。すぐ上で述べたように、「リンダリンダ」が「美しさ」を「やさしさ」として定義していることは誰にでもわかるし、そのように考える立場があることはブルーハーツに教わらずともすでに知っていることである。しかし、ドブネズミを「やさしい＝美しい」と言い切るブルーハーツのその考え方はどのような立場から出てきたものなのだろうか。私は長年ブルーハーツに親しんできているが、ここがずっとわからないままだった。

同じように、「TRAIN-TRAIN」にもわからない箇所があった。「世界中に定められたどんな記念日なんかより あなたが生きている今日はどんなにすばらしいだろう 世界中に建てられてるどんな記念碑なんかより あなたが生きている今日はどんなに意味があるだろう」という箇所は昔から私のお気に入りであったが、以下の箇所、すなわち

栄光に向って走るあの列車に乗って行こう
はだしのままで飛び出してあの列車に乗って行こう
弱い者達が夕暮れさらに弱い者をたたく
その音が響きわたればブルースは加速して行く
見えない自由がほしくて
見えない銃を撃ちまくる
本当の声を聞かせておくれよ

というAメロからBメロにかけての詞については何を言いたいのかさっぱりわからなかった。「栄光に向かって走る列車」とは何か、なぜ「はだしのままで飛び出」すのか、そしてそれ以上にわからなかったのは、「弱い者達が夕暮れさらに弱い者をたたく その音が響きわたればブルースは加速していく 見えない自由がほしくて 見えない銃を撃ちまくる本当の声を聞かせておくれよ」という詞であった。ここに関しては「リンダリンダ」以上にナゾだった。「見えない銃を撃ちまくる」という詞自体もわからなかったし、この荒っぽい表現が、「世界中に定められたどんな記念日なんかより あなたが生きている今日はどんなに素晴らしいだろう」という素敵な詞となぜ共存しているのか、わからなかったので

ある。

しかし、この大学で「キリスト教の世界」という授業を担当するようになってから、私には色々わかってきた。ブルーハーツが問題にしている事柄は、福音書に書かれていること、つまりナザレのイエスが問題にしている事柄と同じだと考えれば、すべてつじつまが合うことに気が付いたからである。もう少し正確に言えば、ブルーハーツをイエスと同じ問題意識を持っているものとして理解すれば、これらの「ナゾの歌詞」を自分なりにうまく解釈できるようになった、ということである。ドブネズミを「美しい＝やさしい」と考える背景にある哲学を理解できるようになり、「見えない銃を撃ちまくる」とはどういうことか、「弱い者たちの夕暮れ」になぜ「さらに弱い者がたた」かれるのか、こういった「ナゾの歌詞」が理解できるようになった。それらは、私のお気に入りの「世界中に定められたどんな記念日なんかより　あなたが生きている今日はどんなに素晴らしいだろう」という歌詞とまったく同じ立場から語られていた！

私がブルーハーツを「深い」としっかり言えるようになった背景には以上の経緯がある。本稿は、こういった私の歌詞理解をひとつのブルーハーツ論としてまとめる試みである。

私の解釈はナザレのイエスの思想に基づいてブルーハーツの歌詞を分析するという方法に基づいている。そこで、ブルーハーツとイエスを関係させることについて誤解を招かないようにいくつか注記しておこう。まず、ブルーハーツがキリスト教についての知識を持っているかどうかということや、或いはクリスチャンであるかどうかなどといったことは、仮にそういう論点があるとしても、そんなことは私にとってまったくどうでもよい。イエスの福音もブルーハーツの歌詞も、自分たちが生きていく上で大事なことは何かという点についての真理を穿つ洞察から出ている。そして、両者の答えは同じであるように私には思われる。このことだけが重要なのである。また、私は「結局は皆同じことを言っている」といった論調の安易なユニバーサリズムとは常に無縁でありたいと思うし、ブルーハーツを理解するためにはキリスト教を学ぶ必要があるなどという馬鹿げた主張を行うつもりも毛頭ない。自分の好きなロックバンドの歌が、同じく自分の好きなナザレのイエスの思想とつながっているように思われることを発見した個人的な喜びをここに綴りたいだけである。そしてもうひとつ。これは蛇足かもしれないが、これまで私は「キリスト教の世界」の中で何度もこの解釈を受講生に検討してもらっており、幸いにも学生たちは私の解釈を好意的に受け入れて、ブルーハーツの歌詞の意味だけでなくイエスの思想をよりよく理解できるようになったと評してくれている。以上の点を記しておきたい。私のこの試みは決して衒学的な思い付きではないと私は信じている。

なお、本稿の読者として私が想定するのはブルーハーツに何らかの意味で関心を持つすべての人であるので、研究書や専門書を引用することは一切せず、なるべく注もつけずに読みやすい内容になるよう心掛けた。学術的な文献を用いる場合も入門書の類だけに限定し、興味を持った読者がさらに自分で参照しやすいよう配慮したつもりである。

第一節：「善いサマリア人のたとえ」

福音書に書かれた色々な記事の中でも最も有名なもののひとつが「善いサマリア人のたとえ」だろう。予備知識がなくともこのたとえ話の意味は理解できるし、「困っている人がいたら助けなければならない」といった教訓を簡単に引き出せる点で、キリスト教という文脈を取り払って世界中どこに持っていっても十分に通じると思われる「いいはなし」だといえる。しかし、このたとえ話は単にそれだけではない強烈な意味を持っている。その意味がわかればブルーハーツもわかる。「善いサマリア人のたとえ」の全文を引用しておこう。聖書には新共同訳を用いている。また、読みやすいように適宜段落分けをした。

すると、ある律法の専門家が立ち上がり、イエスを試そうとして

言った。「先生、何をしたら、永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか。」イエスが、「律法には何と書いてあるか。あなたはそれをどう読んでいるか」と言われると、彼は答えた。「『心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛しなさい』とあります。」イエスは言われた。「正しい答えだ。それを実行しなさい。そうすれば命が得られる。」

しかし、彼は自分を正当化しようとして、「では、わたしの隣人とは誰ですか」と言った。イエスはお答えになった。「ある人がエルサレムからエリコへ下って行く途中、追いはぎに襲われた。追いはぎはその人の服をはぎ取り、殴りつけ、半殺しにしたまま立ち去った。ある祭司がたまたまその道を下って来たが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。同じように、レビ人もその場所にやってきたが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。

ところが、旅をしていたあるサマリア人は、そばに来ると、その人を見て憐れに思い、近寄って傷に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして、自分のロバに乗せ、宿屋へ連れて行って介抱した。そして、翌日になると、デナリオン銀貨二枚を取り出し、宿屋の主人に渡して言った。『この人を介抱してください。費用がもっとかかったら、帰りがけに払います。』

さて、あなたはこの三人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか。」律法の専門家は言った。「その人を助けた人です。」そこでイエスは言われた。「行って、あなたも同じようにしなさい。」

――ルカによる福音書10章25～37節

このたとえ話は、困っている人がいれば見捨てたりせず助けてあげましょうというメッセージを少なくとも持っているといえる。これぐらいは誰が読んでもわかるだろう。しかしこのたとえ話はこれに尽きるものではない。多くの前提の上に語られているからである。

まず、追いはぎあった「瀕死の或る人」はユダヤ人である。そして、彼を見捨てた祭司とレビ人も同じユダヤ人である。だから、このたとえ話はユダヤ人が同じユダヤ人を見捨てたという話であるといえる。さらには、祭司もレビ人もユダヤ教信仰の中核を担う階級の人たちであり、要するにユダヤ人の中でも身分の高い人たちである。彼らは戒律を順守し、高潔で人徳があるとみなされるような人たちである。このたとえ話はそんな彼らが同胞を見捨てたという話でもあることになる。なぜ彼らは同胞を見捨てたのだろうか。

その理由を探る前に、サマリア人とはどういう民族なのかということも見ておこう。ユダヤ人の国であるイスラエル王国は紀元前九二二年頃ソロモン王が死んだ後に分裂して南北に割れ、その二〇〇年後には北王国がアッシリアに滅ぼされてしまった。その時、指導的立場にあったユダヤ人たちは国を追い出されたが、残ったユダヤ人たちは北王国の地への入植政策をとったアッシリアの人たちと徐々に混血していき、「正統ユダヤ教」から離れて別の宗教を信仰するようになっていった。これがサマリア人である。他方で南王国の方もアッシリアを倒したバビロニアに滅ぼされ、首都バビロンへ連行されるという苦難を強いられたが、信仰を守って強く結束しこれに耐えた。こうして、「純血」を守り抜いた南王国の「正統ユダヤ人」たちはサマリア人を軽蔑し、彼らを迫害するようになっていったのである。

ユダヤ人たちは自分たちの宗教の戒律から外れる行為は「汚れ」を産み出すと考えた。サマリア人はもはや「異教徒」であり、それゆえ「汚れた」民族であるから、彼らを慎重に避けなければならない。「汚れ」に触れると自分にも「汚れ」が付着するからである。ユダヤ人の聖典であるヘブライ聖書（旧約聖書）の「民数記」19章22節にある「汚れた者が触れるものはすべて汚れる（＝それゆえ、汚れた者を避けよ）」という言葉がその事情を説明しているだろう。こうしてユダヤ人たちは「汚れた」サマリア人を敵視し徹底的に避けていたのである。だから、半殺しにさ

れユダヤ人は自分の敵であるところの「触れると汚れるサマリア人」の助けを受け入れたという点も重要になってくる。以上の点をおさえた上で、このたとえ話に含まれる意味を見ていこう。

第二節：愛とは何か[2]

祭祀とレビ人が仲間であるはずのユダヤ人を見捨てたことには理由がある。それは、この瀕死のユダヤ人も瀕死であるというまさにそのために「汚れた」存在になってしまっていたからである。ヘブライ聖書の「レビ記」を参照してみよう。

> 主はモーセに仰せになった。アロンに告げなさい。あなたの子孫のうちで、障害のある者は、代々にわたって、神に食物をささげる務めをしてはならない。だれでも、障害のある者、すなわち、目や足の不自由な者、鼻に欠陥のある者、手足の不釣り合いの者、手足の折れた者、背中にこぶのある者、目が弱く欠陥のある者、できものや疥癬のある者〔…〕、以上の障害のあるものは誰でも、主に燃やしてささげる献げ物の務めをしてはならない。〔…〕彼には障害があるから、垂れ幕の前に進み出たり、祭壇に近づいたりして、わたしの聖所を汚してはならない。
>
> ——レビ記21章16〜23節

ここに書かれている内容からわかるのは、要するに病人は病人であるということによって「汚れた」存在として見なされることになる、というユダヤ人の共通理解である。半殺しにされたこのユダヤ人は、「手足の折れた」状態であったかもしれないし、目をつぶされて「目が弱く欠陥のある」状態であったかもしれない。彼は「汚れた」存在であり、それゆえ、戒律を厳格に守る祭祀やレビ人はこの「汚れた」存在を注意深く避けたのである。

他方で、見捨てられたこの瀕死のユダヤ人は、同胞に見捨てられたというその事実によって、自分は「汚れた」存在になってしまったことを理解しただろう。そして、自分を「汚れた」と認定してユダヤ社会から排斥してしまうような戒律の存在意義を疑い、祭祀やレビ人が誇るそのような戒律主義の愚かさに気付いたに違いない。だから、彼は「汚れている」と蔑視されてきたサマリア人の介抱を受け入れることができたのである。戒律主義を捨て去った立場においては、サマリア人をサマリア人であるという理由でその人格を否定することは完全に間違っているだろう。サマリア人は汚れてはいないし、自分も汚れてはいない！

このサマリア人は圧倒的にやさしい。面倒なことに巻き込まれるかもしれないのに、すすんで介抱し、お金を払い、見ず知らずであるあかの他人のために尽くしている。イエスはこういった行為に愛を見ている。イエスは次のように言う。

> 自分を愛してくれる人を愛したところで、あなたがたにどんな恵みがあろうか。〔…〕また、自分によくしてくれる人に善いことをしたところで、どんな恵みがあろうか。
>
> ——ルカによる福音書6章32〜33節

自分を愛してくれる人を愛することは自然なことであり、別に難しいことではないし、自分に親切にしてくれる人に対して親切にすることも同じであろう。それぐらいなら誰でもできるし、「やさしくしてくれた人にだけやさしくする」というように、行為に一定の条件を付けることにつながってくる可能性もある。イエスはそのようなレベルで語られる「愛」や「やさしさ」に一切価値を置かない。一口に「愛」や「やさしさ」といっても色々あるだろうが、イエスはこのサマリア人が持つような「愛」と「やさしさ」こそ、一番大事だと言っているのである。[3]

第三節：ドブネズミのやさしさ[4]

ではなぜこのサマリア人はそのような「愛」を持っているのだろうか。なぜそこまで人にやさしくできるのだろうか。それは、サマリア人が差別され苦しんできた側の人間であるからである。彼は「優劣」の「優」の側にいる人たちから馬鹿にされ見下され排斥されてきた「劣」の側にいる社会的弱者である。まともな仕事も地位もお金も頼れる人もなく、社会の端っこで細々と生きているような人をイメージしてみればよい。そんな彼には、恐らく守るべき自己がないだろう。エゴがないといってもよい。自分は無力であり、べつにたいした人間ではないという諦めに似た自覚を持っている。だから、なけなしのお金をいとも簡単にあかの他人のために使うことができる。苦しむ者は苦しむ者を理解できる。苦しむ者と苦しむ者のあいだで、こういった「愛」が生まれる。エゴイズムのある場所に「やさしさ」は生まれない。イエスが徹底的にエゴイズムを嫌っていることは次の引用からも明らかである。

自分は正しい人間だとうぬぼれて、他人を見下している人々に対しても、イエスは次のたとえを話された。「二人の人が祈るために神殿に上った。一人はファリサイ派の人で、もう一人は徴税人だった。ファリサイ派の人は立って、心の中でこのように祈った。『神さま、わたしはほかの人たちのように、奪い取る者、不正な者、姦通を犯す者ではなく、また、この徴税人のような者でもないことを感謝します。わたしは週に二度断食し、全収入の十分の一を献げています。』ところが、徴税人は遠くに立って、目を天に上げようともせず、胸を打ちながら言った。「神様、罪人のわたしを憐れんでください。」言っておくが、義とされて家へ帰ったのは、この人であって、あのファリサイ派の人ではない。だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる。」

――ルカによる福音書18章9～14節

このファリサイ派の人は極めて真面目な人間であったに違いない。誰でもついやってしまう小さな悪でさえ決して行わないよう自制しているし、しかもさらに毎週決まった断食を行い、多額の献金をし、罪滅ぼしをする。彼の中にはもはや少しの悪もないかのように見える。しかし、イエスはこの人を「義＝正しい」とはしない。なぜなら、彼は自分の高潔さに満足して他人を見下しているからである。そもそも自分を「えらい」と誇って誰かを見下す人間がどうして他者に対してやさしくなれるというのだろう!? イエスは「善いサマリア人のたとえ」によって「人にやさしく」という行為の構造を明らかにしているのである。

ここまでくれば、なぜドブネズミが「誰よりもやさしい」と言えるのかという本稿の問題にも答えることができる。答えは簡単である。ドブネズミはエゴイズムとは無縁の存在であるからである。エゴイズムと無縁であるから、「誰よりもやさしい」のである。ドブネズミという言葉はその定義上、見た目の汚さ、匂いの臭さ、頭の悪さ、品の無さといったような様々な負の側面を持つ大きなマイナスの存在を指示している。それだけのマイナス負荷を帯びた存在は、他人に対して「オレはえらい」と誇れるような自己を持たないだろう。上のルカ18章の引用における「神様、罪人のわたしを憐れんでください」と嘆いた徴税人、半殺しにされたユダヤ人、そしてその瀕死のユダヤ人を助けたサマリア人。要するに彼らがドブネズミなのである。社会から除け者にされ、疎まれ、近づくなと罵られる彼らには、エゴイズムがない。それゆえ彼らには「やさしさ」がある。ブルーハーツはここを見ている。ドブネズミは「劣」の側にいる。だから「誰よりもやさしい」のである。

第四節：見えない銃を撃ちまくる

「リンダリンダ」の解釈に関してはここまでにして、「TRAIN-TRAIN」に移ろう。私が解釈したい箇所を改めて引いておく。

栄光に向って走るあの列車に乗って行こう
はだしのままで飛び出してあの列車に乗って行こう
弱い者達が夕暮れさらに弱い者をたたく
その音が響きわたればブルースは加速して行く
見えない自由がほしくて
見えない銃を撃ちまくる
本当の声を聞かせておくれよ

「TRAIN-TRAIN」の歌詞については冒頭の「栄光」をどう理解するかということによって、かなり幅広い解釈が可能だろう。ウェブ上にも色々な解釈が出ているようであるが、私は「リンダリンダ」と「善いサマリア人のたとえ」から取り出した「やさしさ」という言葉をキーワードにして解釈してみたい。

私は「栄光」を「人と人とがやさしく生きられる世界」と考える。実は私の念頭には「神の国」という概念が置かれているのであるが、「栄光＝神の国」と定義するとどうしても私の解釈を「ザ・宗教」のように受取ってそっぽを向いてしまうような人も出てくるだろう。私はイエスの言う「神の国」の内実を「人と人とがやさしく生きられる世界」のことであると理解しており、徒に宗教的な用語を用いなくともイエスの主張は理解できるし、宗教的な文脈を離れてもイエスの主張はそのまま通用すると考えている。[5] だから、今は「神の国」という言葉を使わずに、文字通りの意味で「人と人とがやさしく生きられる世界」を「栄光」のことであるとしておくが、適宜キリスト教の言葉も差しはさんでおこう。その方がわかりやすい場合もあると思うからである。

さて、以上のように「栄光」の意味を設定すると、「栄光に向かって走る列車」の意味も定まってくる。列車は一人で乗るものではなく、色んな人たちといっしょに乗るものである。「人と人とがやさしく生きられる世界」にもたくさんの人が存在することになるはずである。一人だけでそういう世界を作っても意味がないからである。「人と人とがやさしく生きられる世界」を建設しようと列車に乗る人は、もともとはあの祭祀やレビ人と同じで、「世の中の常識（＝戒律）」を順守することで人徳が得られると勘違いしていた人である。しかし、そのような考えに基づいて行動しても決して人徳は得られない！　真に「人にやさしく」なんかできるわけがない！　このことに気付いたので、靴も履かずに慌てて外に「はだしのままで飛び出し」たのである。一刻も早くそのような考えを捨て去らねばならないからである。

「優劣」の「優」の側にいる人たちは「劣」の側にいる無力な人たちを見下す。しかし、無力な人は無力であるがゆえにエゴイズムとは無縁であり、その限りで逆に人間としては遥かに「高められ」た存在だといえる。前節で引用したイエスの「だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる」という言葉の通りである。戒律順守を誇る「強者＝善人」は、エゴイズムに支配される「低くされた＝弱い」人間である。そして、弱い人間が「たたく＝いじめる」のは自分より弱い人間に決まっている。しかし、こういう「善人面した弱い強者」がえらそうに生きる倒錯した世界は今や「夕暮れ」を迎えて終わりつつある。そのことに焦って、彼らは「オレはえらい」と虚勢を張っているのだろうが、それだけ一層彼らに対する異議申し立ては大きくなる。だから、「ブルースは加速してい」き、黒人労働歌が持つ苦しみと忍耐と抵抗の熱量のようなものがどんどん大きくなっていくことになる（＝「悔い改めよ。天の国は近づいた」マタイによる福音書4章17節）。

ここで重要になるのが、「見えない自由」とは何かということである。これは「見える自由」と対比させるとわかりやすい。「見える自由」とは外面的な自由で、まさしく「世の中の常識（＝戒律＝校則＝社則など）」を守るかどうかという場面で問題になる。これに対して「見えない自由」が問題になるのは、たとえば空気を読んで言いたいことが言えないような状況を打破するかどうかという場面である。あの瀕死のユダヤ人を助けたサマリア人は空気など読んだはずがない。周囲にいたユダヤ人たちは半殺しにされたユダヤ人の方に一人の男が近づいていくのを見て、お

いおい、まさか手当しようとしてるんじゃないだろうな、そんなことをしたら汚れてしまうぞ、と思っただろう。しかし、よく見たら彼はユダヤ人ではなく、敵であるサマリア人であった。おいおい、常識のないやつめ。お前たちサマリア人がユダヤ人に触れようなどとは、なんとおこがましい！ 傍観していたユダヤ人たちは皆このように思ったに違いない。しかし、サマリア人はおかまいなしに介抱した。今問題にすべきは、戒律を守るかどうか、常識を守るかどうかではなく、苦しんでいる人を助けるかどうかだけであり、それ以外のことは一切関係ない。「然りは然り、否は否と言え。それ以上は悪魔が言わせるのだ」（マタイによる福音書5章35節）とイエスが言うとおり、[6] このサマリア人は「人にやさしく」するべき時にそうすることだけを考えて行動したのである。

こういう空気を読まない態度は、現実的には荒っぽい態度となって現象する場合が多いと思う。読者の周りにいる「KY（空気を読まない人）」と呼ばれる人を想起すれば、「空気を読まない」とは「空気を破壊する」ことであり、その限りでそれは荒々しい態度であることに気付くだろう。だから、こういった態度は「見えない銃を撃ちまくる」という激しい言葉で表現されるにふさわしい。「見えない銃を撃ちまく」って、空気を破壊して、「本当の声を聞かせておくれよ」（＝「然りは然り、否は否と言え」）という歌詞が続くことには理由があるのである。空気を読んで当たり障りのないように振舞うことしかできない人が、どうして「人にやさしく」できようか、とブルーハーツもイエスも言っている。これが私の解釈である。

おわりに：劣等生でじゅうぶんだ

世界中に定められたどんな記念日なんかより
あなたが生きている今日はどんなに素晴らしいだろう
世界中に建てられてるどんな記念碑なんかより
あなたが生きている今日はどんなに意味があるだろう

「TRAIN-TRAIN」のこの箇所が私のお気に入りであることは本稿の「はじめに」で述べた。私はこの箇所も前節で解釈した箇所も同じ立場から語られていると理解している。最後にこの点について述べておきたい。

この箇所は、「世の中」という客観が「大事」だと定めた記念日や記念碑に対して、わたしにとって「大事」な日があるとすればそれは「あなたが生きている今日」であるという主観的な心情をぶつけているように見えるが、それだけではないと私は思う。もちろん、少なくともそういった個人的な情熱の吐露でもあるだろうが、前節での解釈に引き付けてみれば、さらに別の意味を持っているように思われる。

まず、記念日や記念碑という存在は、「優劣」の「優」の側に位置するものだろう。他のものと比較して、その「価値」の大きさが認められるからこそ記念されるわけである。ここでは比較というものが前提になっている。比較がある限り、必ず「優劣」がつく。これに対して、「あなたが生きている今日」を「素晴らしい」と喜ぶのは、「あなた」が高収入だから、美人だから、高学歴だから、スタイルがいいから、一流企業に勤めているから、家事ができるから、、などではまったくない。シンプルに「あなたの存在そのもの」がそれだけですでに他のどんな属性よりも価値があるからである。ここには比較というものは存在せず、それゆえ「優」もなければ「劣」もない。だからエゴイズムがない。「あなたが生きている今日はどんなに素晴らしいだろう」という言葉によってエゴイズムのない場所が開示されていることを、「TRAIN-TRAIN」を聴く人は直観的に感じ取っているのだと思う。

一般的に「世の中の常識」が規定する「価値のあるもの」の正体とは、比較の上に成立する「優劣」の「優」である。しかしすでに述べてきたように、そのような場所には「やさしさ」はない。[7] だから、「人にやさしく」という立場からすれば、そのような「優」にはむしろ価値はない。仮にも世の中に「価値のあるもの」があるとすれば、それは「やさしさ」がある場所に見出されるはずである。それは比較を絶して「美しく」輝いているだろう。「善いサマリア人のたとえ」を通して、「リンダリンダ」

と「TRAIN-TRAIN」は以上のようにしてつながるのである。

「ドブネズミ」を「誰よりもやさしい」と表現して「劣」の側へのあたたかい視線を持ち、「あなたが生きている今日はどんなに素晴らしいだろう」と歌うブルーハーツ。最後に、彼らの別の曲の歌詞を引用してこの評論のまとめに代えたい。

●ロクデナシ（一九八七年）作詞・作曲：真島昌利

役立たずと罵られて 最低と人に言われて
要領良く演技出来ず 愛想笑いも作れない

死んじまえと罵られて このバカと人に言われて
うまい具合に世の中と やって行くことも出来ない

全てのボクのような ロクデナシのために
この星はグルグルと回る
劣等生でじゅうぶんだ はみだし者でかまわない

お前なんかどっちにしろ いてもいなくても同じ
そんな事言う世界なら ボクはケリを入れてやるよ

痛みは初めのうちだけ 慣れてしまえば大丈夫
そんな事言えるアナタは ヒットラーにもなれるだろう

全てのボクのような ロクデナシのために
この星はグルグルと回る
劣等生でじゅうぶんだ はみだし者でかまわない

誰かのサイズに合わせて 自分を変えることはない
自分を殺すことはない ありのままでいいじゃないか

全てのボクのような ロクデナシのために
この星はグルグルと回る
劣等生でじゅうぶんだ はみだし者でかまわない[8]

---

1 歌詞は基本的に、ザ・ブルーハーツ（一九八八）『ドブネズミの詩』角川書店によったが、CD『LIVE ALL SOLD OUT』の歌詞カードを用いた箇所もある。

2 本節の議論を行うにあたって、私は岩田靖夫（二〇〇三）『ヨーロッパ思想入門』岩波ジュニア新書から大きな恩恵を受けている。

3 ギリシア語（※新約聖書はギリシア語で書かれている）で「愛」を意味する言葉としては、アガペー、エロース、フィリア、ストルゲーがよく知られている。この四つの中ではアガペーがイエスの重視する「愛」に相当する。

4 本節の議論は、八木誠一（一九六八）『人と思想　イエス』清水書院に基づいて構築されている。

5 私のこのような考え方には、田川建三（一九八〇）『イエスという男』三一書房が大きく影響している。「大きく影響している」と今書いたが、それは、私は田川建三の解釈そのものを使っているわけではなく、影響を受けて自分なりに考えたという意味である。

6 ここは新共同訳ではなく、八木、前掲書による訳に基づく。

7 問題の本質はエゴイズムであるから、「優」であってもそこにエゴイズムがないならそれでいいし、「劣」の側であっても「妬み」や「ひがみ」などがエゴイズムとして出てくるなら当然問題だろう。このあたりの事情に関しては、八木、前掲書に優れた分析がある。

8 本稿はJSPS科研費（20K21942）による成果の一部である。